

松浦武四郎とアイヌ民族

「天之穂」で「お日誌」が問うもの

滝川 康 治

下川の歩みを語る時「開拓史観」とでも言うべきものがある。明治三十四年の岐阜県人・古屋達造らによる開拓着手をもってこの町の始まりとして「未開の大地を切りひらき、厳しい自然の中で鉄を振るい、郷土の基礎を築いた」式の見方をする。これが一般的で、町史なども「開拓」を軸にした文脈で構成されている。

しかし、和人による「開拓」の営みは、たかが九十年弱にしか過ぎない。名寄川やその支流で人々の営みが繰り返され、豊かなサケ・マスを糧として、野に山菜を求め、山中に熊や鹿を追った先住民族がおり、そのことは今も残るいくつつかのアイヌ語地名の中に刻み込まれている。

先住のアイヌ民族と「北海道で一旗あげよう」という和人開拓者を結ぶ歴史の中に生きた人物として、松浦武四郎がいる。昨年は、武四郎の没後百年の節目の年だった。北海道開拓記念館主催の特別展も開かれ、足跡をたどりつつ歴史を見つめる催しもあった。

松浦武四郎は文政元年（一八一八）二月、三重県の郷士の

という。

二つの日誌の記述の違いを知り、その後、市立名寄図書館郷土資料室が開催する「天塩川流域史講座」に参加して、武四郎が書き残した事柄の一端と、幕末期のこの地方のアイヌ民族に対する庄政の様子を学ぶことができた。

「取調日誌」は、つい最近まで「武四郎総目次に題号だけ残る幻の日誌と目されていた」解説した丸瀬布町の武四郎研究家・秋葉実氏）もので、一九八二年に公刊された。武四郎の本心は、この日誌を世に出したかったらしいが、幕府の検閲の下では叶わなかった。幕末に公刊された「天塩日誌」では、時代の暗黒面は大幅に省かれて、地理や風物が主体の記述となっている。それに比べると「天之穂日誌」では、「一文化や風俗は後景にしりぞぎ、あきらかに方法的な自覚のもとに、人別帳と現住民との照合を克明に行ない、民族としてのアイヌ総体が滅亡の淵に立たされている状態を、その下手人である和人の所業の告発と共に記録し、奉行所上部に訴えることが前面に出てくる」（花崎翠平著「静かな大地―松浦武四郎とアイヌ民族」・八八年岩波書店刊）武四郎の良心が伝わってくる記録である。

「天之穂日誌」の中で、和入地前の名寄川筋はどのような描かれているのだろうか。石狩、留萌、苫前をへて、武四郎がテシホ運上屋から四人のアイヌの案内人とともに丸木舟二隻で天塩川上流の調査に出発するのは、安政四年六月九日（陽曆七月二十九日）のことである。ナヨロ（現名寄市日進付

四男として生まれる。少年時代は津藩の儒学者の下で学び、その後、日本各地を旅した。弘化二年（一八四五）から安政五年（一八五八）にかけて合計六回にわたって蝦夷地を踏査して、膨大な日誌と地図をまとめて内陸部の実態を明らかにした。名寄川筋は安政四年に踏査している。

この調査で多くのアイヌの助けを借り、同じ人間として交流する中で武四郎は、彼らを苦しめている場所請負制度や松前藩などへの批判を強めた。明治の新政府は、探検家・武四郎の知識と能力に期待して、開拓判官などに任命しており、「北海道」の名づけ親にもなった。その後、武四郎は幕藩時代の悪弊一掃を開拓使に進言するが、それが受け入れられないと知るや判官から身を引き、アイヌ民族と北海道に深い愛情を寄せながらも、再び行政にかかわることなく生涯を終えている。

武四郎に対する私の見方は、五年ほど前までは「探検家」「北海道の名づけ親」という域を越えていなかった。ある日、美深町の郷土研究会の人たちが、安政四年の武四郎の天塩川踏査の際、同町恩根内付近に宿営した場所を調べていることを知り、興味を抱いた。会員たちは、良く知られている「天塩日誌」を手掛かりに宿営地を探していたのだが、この時、私は友人から同日誌の原本があり、最近それが解説されて本になったことを教えられた。「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」であり、このうちの「天之穂日誌」が「天塩日誌」のフィールドノート（野帳）といえるもので、史料としては第一級品

（近）に宿営後、同十六日にチノミ（中名寄八ヶ九線付近）泊翌十七日は名寄川をさかのぼり、由仁内川まで行って上流の様子を聞き取り、夕方サンルベシベ（下川町サンル）に戻ってフキの葉を集めて小さな小屋を作り、ここに宿泊している。武四郎の関心は、川筋のアイヌの窮状に注がれる。鈴木邦輝氏（名寄市郷土資料室学芸員）のまとめによると、同日誌での天塩川流域のアイヌ人口は二百三十一人、うち名寄川筋では六か所九戸の現存戸数と六か所の伝承戸数を記録している。しかし、場所請負制度の下でアイヌの生活は困窮し、若者は浜で事実上の強制労働に従事させられ、川筋に残るのは老人と病弱者、子供ばかりだった。

チルスシ（名寄市旭東付近）では、浜に雇いに出された十八歳の娘が番人の妾にされて梅毒をうつされ、家元に追い返されていた。武四郎は養生もさせず、一粒の米、一服の薬も与えずに送り返す番人のやり方に憤り、人口減の一因と嘆く。一家の窮状に同情した武四郎が土産に煙草・米・針などを差し出すと、娘がキナ（こぎ）を返礼に出してくれた。もう返すものがなくなった武四郎が手拭いを渡そうとすると、娘はこれを断り「ヤーライケヤエカト（返礼は仕来りなので、そのまた返礼はご無用です）の意か秋葉氏原注」といい、薬を求めた。これを聞いた武四郎は涙を流すが、梅毒の薬はなく、別の薬を渡して効能を説明し、この家を後にしている。

チノミでは、ナヨロの乙名（まとめ役）でこの辺りで一番の暮らしというエレンカクシ宅に宿泊。しかし、家主と息子、

(二十六歳)、四人の孫は浜で働かされている。武四郎が土産を手渡すと、トレフ餅(ウバユリの根で作った団子)を振る舞ってくれ、手厚く世話してくれた。

中名寄から上名寄にかけて、人家や伝承上の人家を多く日誌に記録している。ここでも、働き手のほとんどが浜に取られ、残った者もサンル方面などへトレフ取りに出掛け、家は留守である。トウシチャシ(上名寄十五線付近)では、鮭の産卵場所として良好で、漁業に便利だったため、昔からアイヌが住んでいたが、一軒しか残っていなかった。病気の家主と妻、三人の子供が生活しており、二十一歳の長男とその妻は浜で働かされている。名寄川には魚が豊富で、武四郎はウエンムム(上名寄十七、八線付近?)と呼ばれる支流の小川近くにウライ(築川やな)を目にしている。

名寄川上流を踏査した武四郎はサンルベシベに戻り、同行のアイヌに粥を振る舞い、夜はにぎやかで、寝ないでいたところ、ふと外を見ると、十七夜の月明かりの中で子供も老女も蚊に刺されながらオヒョウ(ニレの一種・衣料アツシの原料)の皮を裂いていた。「さて、これは?」と思ったが、さして気にもとめず眠った。

翌十八日、名寄川を下りチノミのエレンカクシ宅に立ち寄り、トレフ餅やフイ(ヤチブキ)の根を茹でたもの、鱈のハラ(いくら)をごちそうになったあと、ナイト(名寄市内淵付近)のアヘリカの家で泊まる。夜になって一同が寝ようと思ったが、アヘリカの妻の姿が見えない。心配にな

った武四郎が外に目をやると、やはり月明かりの中でオヒョウの皮を裂いている。

武四郎が「アツシ一反を織りあげるのに何日ほどかかるか?」と尋ねると、アヘリカの妻は「まず山に行って皮を剥ぐのに一日、裂くの一日、紡ぐのに五日、具に仕掛けて二日、織に六日ばかりもかかる」と答える。「一反で何程の値になるのか?」と問うと、「運上屋へ持っていき、カモカモ(曲輪の容器)に米一杯(玄米三升五合)、煙草ならば二把、少しよくて二把半」との答えに大いに驚く。「酒ならば?」と聞くと「椀に三杯」と言う。和人による搾取の実態に触れた武四郎は、場所請負人や支配人、番人がアイヌの尊い労働を省みることなく、酒宴などでたわいもなく飲む時は、肴のよしあり、酌は芸者でなくてはならない、などとせいたくを尽くすことを憤り、そのいくばくかをこのアイヌ達に施すなら、どんなにかその徳を喜ぶだろうに——と嘆き、涙を流して夜明けを持つのである。

日誌の内容をたどる時、武四郎の人物像は単なる「幕末の探検家」にとどまらず、搾取・抑圧され絶望の淵に立っていたアイヌ民族と同じ目の高さで物事をとらえ、幕府の使用人という自らの立場を超えて、後世の人々に記録を通じてアイヌ救済と自然と共存する生き方の大切さを、強く訴えていたことがよく分かる。秋葉氏は「和人の偏見に対し、アイヌと和人は文化を異にするだけ」という卓越した認識を百三十年前に既に備えていたのです。しかし、幕末の政変で進言は世

に出ませんでした(八二・一二・六付北海道新聞)という。この武四郎の認識は、アイヌの人々と起居をともにして道内をくまなく歩き、真摯な気持ちで話を傾け、自らの見方を変えていったことで形成されたものである。前述の花崎昇平著「静かな大地」では、著者自身が武四郎のさまざまな日誌を読み進めて、そのことを感動的にみつめている。

昭和四十三年発行の「下川町史」では、やはり武四郎を本道開拓に貢献した探検家と位置づけて、ダイジェスト版の「天塩日誌」や安政五年に函館奉行所に提出された新道切り開きの意見書の内容が紹介されているが、その後、野帳が公刊されたことを考えると、この町史の内容も書き直す必要がある。岐阜団体の下川入植は武四郎による天塩川筋の踏査から四十四年後のことである。町史には(悪名高い)旧土人保護法が明治三十二年に公布され、それと前後して名寄川沿岸のアイヌが内淵に転居し始めていることや、古老による「昔を偲ぶ座談会」の中で入植当初に町内各所に先住のアイヌがいたことなどが収録されているが、著者も古老の多くもやはり一歩高みから先住民を見ている。「開拓善悪、苦勞、困難を克服」といった見方が大勢を占めていて、自分たちが先住民を追いやったとの認識はほとんどみられない。開拓から九十年近くが経過した今、同じ目の高さからアイヌと接した武四郎の足跡に学びながら、わが町の歴史をとらえ直してみることが大切だと思う。

今は忘れ去られているが、「キトウシヌプリ」(ギョウジヤニンニクのある山・上名寄十二線川向)「ユクサン」(鹿の下りる所・奥名寄の沢)などの地名が町内に残る。山菜や魚、獣を取り尽くさずに、自然に対する祈りを忘れず、人間と自然が調和して慎ましく生きていたアイヌの人々の思いが、一つひとつの地名に刻み込まれている。森林の荒廃や原子力施設による放射能汚染などに対する危機感が広がっている時代だからこそ、生き物と共存して暮らしたアイヌの自然観から学ぶものは多いはずだ。

地名は先住の人々の自然に対する見方や生活を映す鑑といえる。安易に「和風」の地名を付けるのは、ちよつと立ち止まって考え直したほうがいい。それと同様に遺跡は、先人の暮らしを物語る大切な場所である。下川は遺跡の宝庫だという。食糧が豊かで暮らしやすかったからだろう。昨年「三万里の長城」という観光施設を作るために、桜ヶ丘遺跡の一部を破壊してしまう事件があった。現代の遺跡を作るために、先人の残した遺跡を失うのでは話が逆だ。何のための施設づくりなのか、じっくり考えてみる必要があると思う。

松浦武四郎の天塩川流域踏査から百三十年あまり、自然とともに生きるアイヌに接したことで自己変革の道を歩んだ彼の思想は、今でも新鮮である。この町から北海道の歴史をみつめようとする時、武四郎の思想に学びながら、「開拓史観」を問い直すことをお勧めしたい。